

八ツ場ダム建設事業の検証に係わる検討 意見陳述

高崎市

品木ダムの問題

- 1 八ツ場ダム建設の原点である品木ダムの検証項目がない。
- 2 吾妻川の酸性水を中和するために品木ダム上流に2つの中和工場が建設されているが、吾妻川全体を中和していないことが分る。このシステムで中和されたようにいわれているのは、東電が発電のために取水し、導水管を通して吾妻川に流さないようにしているためである。だから、ダムが出来て水が足りなくなって東電に水を吾妻川に流すよう求めた場合、導水管の酸性水は吾妻川に戻り、ダムは崩壊するのではないか。もし 東電からもらえなければ、ダムに水が溜まらないということが予想される。品木ダムの役目を過大評価して建設される八ツ場ダムがいかに無暴であるか・・・
- 3 中和工場は、現在1日約60トンの石灰を投入し続けて中和事業をしているというが、石灰を生成して川に流すこと事態、廃棄物処理法に違反しているのではないか。
- 4 中和生成物の中のヒ素について
溜まり続ける中和生成物を浚渫してダム周辺に積み上げているが、その中に現在ドライベースでヒ素が500トンを溜まっていると上智大学の木川田教授は研究報告している。それは、25億人の致死量といわれている。
本来 ヒ素の危険性を除去する方法として、まずヒ素を分離沈澱させるため、水溶性ヒ素化合物を第2鉄塩によって不溶化処理し、ヒ酸イオンに鉄イオンを加えると不溶性ヒ酸鉄として沈澱させる方法があるが、品木ダムの目的は「中和」が目的であるため、現在までそのような事業はされなかったし、する計画もないことが問題だ。
なぜなら 現在中和生成物は、浚渫し、水を絞ってセメント固化してダムの周辺に積み上げられている。ヒ素を含む産業廃棄物は、汚泥の形をとっているが、排水処理された汚泥は、ヒ酸鉄になっている。それは、PHが高いと水溶性のアルカリヒ酸塩と不溶性の水酸化鉄とに分解する。したがってアルカリ分を多量に含むセメントで固化するとたとえそれがヒ酸鉄で不溶性になっていたとしてもヒ酸鉄が分離して水溶性ヒ酸塩となって溶出して、周辺をヒ素汚染する危険が予測される。ダム建設より、このヒ素の処理と、これ以上不自然な中和を止めることこそ課題。
- 5 その積み上げた堆積物は、それだけで危険なものであるが、問題は火山活動や地震によって崩れ落ち吾妻川に流れ出す危険な地層の上に積み上げられていることである。
- 6 もともと 魚のいなかった川に魚がいること自体不自然であると、地元の人はいっている。そして、それでも 古代からすばらしい文化を育てた温泉地が息づいていたのだ。自然の浄化機能を利用する生活を、大げさにいえば全国各地のこの種の温泉地では当たり前のこととして営んできたのである。自然の仕組みを無視して実行される絵に描いたような八ツ場ダム、図面のままで残したい。

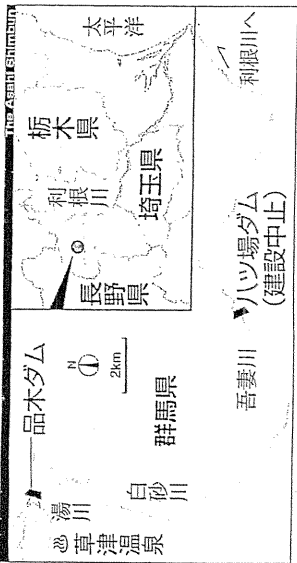
ハツ場水質公表せず

国交省 基準超すと素検出

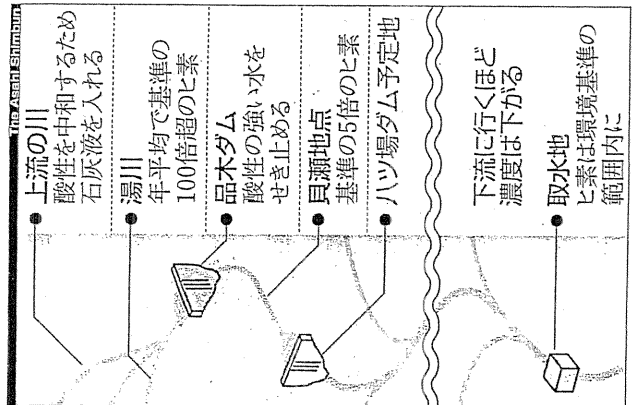
ハツ場ダム(群馬県)の建設予定地の利根川水系の吾妻川とその支流で、国交省が少なくとも93年以降、環境基準を超えるヒ素を毎年検出しながら、調査結果を公表していなかったことが朝日新聞社の調べでわかった。下流で取水する飲用水の水質に影響する結果ではないが、ダム建設の是非に影響しかねないとの見地、国交省が、データの公表を避けて計画を進めていたことになる。

(津阪直樹、菅野雄介、歌野清一郎)

国「下流の取水、問題ない」



国交省は昨年12月から政権交代直前まで、非公表の第三者機関「ハツ場ダム環境検討委員会」を設け、ダム建設が水質や自然環境に与える影響を検討。朝日新聞社は「ハツ場ダム 環境保全への取り組み」と題した報告書入手し



た。非公表とされてきた水質データが記されている。

ヒ素は自然界に広く分布し火山の岩盤や温泉水には高濃度で含まれる。環境基本法に基づき河川の水とヒ素の環境基準は1リットルあたり0.05マイクログラムだったが、世界保健機関がヒ素の発がん性を懸念して厳格化。日本でも93年から同0.01マイクログラムに強化された。

報告書によると、草津温泉を流れる湯川や、酸性の水質を改善するために設置された品木ダムの放水口、ハツ場ダム建設予定地から約10キロ上流の貝瀬地点では86年度以降、ヒ素濃度が高く、基準が強化された93年度以降は基準を上回っていた。08年度の平均値は湯川で基準の約100倍、品木ダムの放水口で約10倍、貝瀬地点で5倍を記録した。

吾妻川の水質は、草津目根

朝日 2009. 11. 13

一枚に収められる「2009」を盛りこみました。

水質問題、避けず議論を

ヒ素の健康被害に詳しい山内博・北里大学院教授(予防医学)の話。火山活動に由来する温泉水は無機ヒ素濃度が高く、お湯につかるだけなら問題はないが、常習的に大量の温泉水を飲み続けるとヒ素が体内に吸収されて慢性的なヒ素中毒にかかる危険性がある。川に流される温泉水と川の水質の問題は解決策がなく、長年議論は避けられてきたが、ヒ素にヒタミン成分を加えて無毒化できる技術が開発され、解決の糸口が見えてきた。首都圏の飲み水は利根川に依存しており、上流の川の水質問題から目を背けることな

効率的なシステム必要

く、改善に取り組むべきではないか。草津白根山周辺の水質を研究している木川田喜一・上智大准教授(地球化学)の話。草津温泉の主要な源泉の一つである方代鉱の源泉水からは年間40以上のヒ素が出て、温泉街の中心を流れる湯川に注いでいる。強酸性の湯川を石灰で中和する事業の副次的効果として、ヒ素のほとんどは中和生成物に付着して下流の品木ダムや河床に沈殿するため、ヒ素濃度は低くなっている。今はコスト的に見合からいはいが、より効率的なシステムを考えていく必要がある。

山系の硫黄鉱山からしみ出す水や草津温泉からの水が流入して酸性が強い。1952年に計画が浮上したハツ場ダムも、コンクリートが溶けることを理由に一度は断念された。だが、63、65年に、強酸性を改善するための中和工場や品木ダムが造られ、湯川など上流の三つの川に石灰液を投入して中和化が進めら

れ、ハツ場ダム計画が復活した。環境省によると、環境基準は政府としての目標値で、基準を超えても国や自治体に法的な改善義務は生じないが、環境基本法は改善に努力するよう義務づけている。しかし、国交省はこうした事態を公表せず、事実上、放置していた。

吾妻川とその支流の水は飲用や農業用水には使用されておらず、国交省は下流に流れるにつれて他の河川と合流するなどしてヒ素は薄まり、ダムでは沈殿するため、下流の利根川での取水で健康被害の心配はない」としている。報告書を作成した環境検討委も、ハツ場ダム完成後は「下流部でのヒ素濃度は下が

11/20 閉店即売会
11/24 福利室
03(3)49914890

ると予測している。環境検討委は今年3月までに3回開催され、当初、8月には報告書を公表する予定だったが、しかし基準を上回ると素をどのような形で公表するかを巡って省内の作業は難航。4回目の開催は9月に延びたが、政権交代でハツ場ダム自体が中止の方向となり4回目の会合は開催されていない。調査結果を長年、非公表としてきた理由について、国交省は「ヒ素の数値が出ると、観光や農業、漁業など流域の幅広い産業に風評被害が起きる可能性があったため」と説明。報告書については存在を認めたと上で「まだ検討段階のもので、最終結論を得たわけではない。今後、公表するかどうかは未定」としている。

六